般演題

O1-048

大学病院小児科における心理相談の現況

石井 美香子、加藤 文代、飯村 淳子、 中村 原子、多田 春香、多田 光、杉原 茂孝

東京女子医科大学東医療センター 小児科

【目的】

当院小児科では3名の臨床心理士(以下、心理士と略す)が 小児科医師からの依頼をもとに心理的支援を行っている。 心理士の専門業務として、1. 臨床心理面接、2. 臨床心理 査定、3. 臨床心理的地域援助、4. 調査・研究があげられる。 今回、当センター小児科で行っている心理相談における現 況を検討し、医療機関における心理相談の意義について考 察した。

【対象】

2016年1月1日から2016年12月31日までの1年間に東京女子 医科大学東医療センター小児科を受診し、心理相談を行っ た患児とその家族282例を対象とした。

【方法】

「臨床心理査定」と「臨床心理面接」に分けて検討した。不登 校が見られた症例ではこれを診断名とし、その他の症例は DSM-5に従い分類した。

【結果】

「臨床心理査定」は全63例、年齢中央値は7.4歳、男児36例、 女児27例であった。目的は、愛の手帳など社会福祉支援の ための心理学的判定、知的障害や発達障害などの確定診断 の補助手段、神経疾患(てんかん、脳炎後など)や低出生体 重児の発達評価であった。「臨床心理面接」は全172例、年 齢中央値は12.2歳、男児88例、女児84例、相談回数中央値 は5回(1~20回)であった。神経発達症群の発達障害が40 例(23%)、身体症状症が26例(15%)であった。49例(28%) の不登校のうち16例で身体症状症を、10例で発達障害の合 併を認めた。また、入院患者においては、急性脳炎と急性 リンパ性白血病の症例に、保護者と本人への心理的支援を 行った。

【考察】

[臨床心理査定]により、療育、就学、教育における発達支 援につなげ、また保護者に心理教育を行うことができたと 思われる。発達障害や不登校の症例では身体症状の訴えや 検査の要望を持って小児科外来を受診し、診察や検査を経 て「臨床心理面接」につながったケースが多かった。検査、 治療など医療的なかかわりと「臨床心理面接」による心理的 なかかわりを並行して行うことにより、保護者・患児への 期待感・安心感をもたらし、結果的に症状の改善に寄与し たと考える。医療機関において心理相談を行うことで、心 身両面からアプローチすることが可能となり、その有用性 が示唆された。